

UTAH



Celesta C8P2
Celesta シリーズの20cmフルレンジユニットでC8P3ユニット同じ振動板と磁気回路が採用されているが、センター部分に小さなサブコーンが取り付けられている。C8P3と振動板、磁気回路が同じなため、TWIN駆動させると大型システムにも負けないスケールで最新の音楽ソースも楽にも対応するシステムとなる。市場価格は10～12万円ペア

Celesta C8P3
UTAH Celesta シリーズの20cm同軸2wayユニット、C12P3と同様にウーファーに中高域用のサブコーンを持つメカニカル3ウェイ構造。ウーファーの振動板はコルゲーションが入ったストレートタイプ。ブルーのアルミのディフューザーを持つトゥイーターの口径はP12C3より少し小さめとなっている。サブコーンはヨーロッパのスピーカーメーカーが好んで採用した構造で、ウーファーのセンター部分に薄い紙でできた花びらのような形状の物が取り付けられていて、ウーファーの振動で駆動される。このサブコーンは、ウーファーとトゥイーターの間の帯域を受け持ち、中間のつながりをスムーズにしている。ウーファー部分はネットワークを搭載しないフルレンジ駆動。トゥイーターを4μのコンデンサーでカットしてパラレル接続されているため、ストレスの少ないストレートなサウンドが魅力的である。市場価格は14～15万円ペア

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。



第13回 UTAH / GE (General Electric)

UTAH社は1940年代にアメリカ Indiana 州 Huntington に設立されたスピーカー専門メーカー。当初ギターや ラジオに使われるにスピーカー等をメインに生産開始してから70年代 の中頃までコンシューマー向けのスピーカーや他社のユニットなども数多くOEM生産していた。一方のGE (General Electric) 社は発明家エジソンが設立した電気照明会社に起源を持つ現在でもアメリカ最大級の複合企業で、その開発当初からコンピューターや原子力発電事業にも成果を上げてきた。日本のオーディオマニアの間ではパナソニックやJBL製の真空管は良く知られているが、スピーカーも作っていた事はあまり知られていない。アメリカがオーディオブームで賑わう50年代頃はGEも意欲的にコンシューマー向けのハイエンドモデルスピーカー、アンプ等を開発していたが、その後同社の設立したRCAに音響部門は受け継がれていた。



トゥイーターはアルミ製のディフューザーでカバーされている

UTAH Celesta C12P3

1960年代の後期頃に発売されたCelestaシリーズの30cm同軸2wayユニットの最高位機種。当時アメリカで流行っていたスペースデザインを取り入れたUFOのようなユニットデザインが目を引き、随所に新しい技術が取り入れられている。ウーファーのコーン紙は他社では見られない逆カーブドコーンでセンターに中高域用のサブコーンが装着されている。エッジには経年劣化の少ない布製のインサイドロールしたタイプが採用されている。トゥイーターは10cm口径の紙の振動板で、細かい穴が開いたアルミ製 ディフューザーでカバーされている。一見するとどんな音で鳴ってくれるかイメージしにくいですが、レンジが広くフラットでレスポンスが速い特性を持ち合わせているため、音楽ジャンルを問わず最近のデジタル音源にも相性が良いサウンド。市場価格は18～20万円ペア

本文 / 田中伊佐資

キャプション / 岡田圭司 (アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦 (彩虹舎)

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

GE (General Electric)



背面には当時の仕様解説書も貼られている

GE A1-406B
GEがこのA1-401 のために開発した DISTRIBUTED PORT CABINET と名付けられた箱の後ろの角が斜めに角度が付けられたセミコーナータイプ。正面バツフルの下半分に低音用に直径3cm くらいの丸穴が複数開けられていて、一般的なバスレフ箱の低音ポートとは設計が異なり、低域を少しディフュースして広がりのある音場を狙っている。また、箱のサイズは30cmユニットとしてはかなり大きめのサイズとなっていて、搭載しているトゥイーターの高域特性が良く、そして高い能率にマッチングさせている。市場価格は80万円前後ペア



GE A1-401
正面から見るとまるでインカ帝国の金色に輝く飾り物のような錯覚をしてしまう。1950年代の始めにGEが意欲的に開発したユニットで、紙製の振動板を持つ7cm口径のトゥイーターと30cm口径のウーファーの2way 構造となっている。フィクスエッジのウーファーはいくつもスリットが開けられたアルミ製のディフューザーを持ち、そのカバーの中央部分にトゥイーターユニットが取り付けられている。ネットワークは搭載せずウーファーはフルレンジ駆動、トゥイーターが2μのコンデンサーでローカットされている。このユニットも外観からは音がイメージしにくいですが、ウー全体がディフューザーでカバーされているにもかかわらず、レンジも広くしっかり前に音場が広がるサウンドに驚かせられる。市場価格は28～30万円ペア

UTAH / GE

GEの黄金仮面からは先入観を覆す音が飛び出した

いつものように「アトリエ Je-tee」と書かれたドアを開けて、勝手になかへ進むと、美しいコバルトブルーのユニットが目飛び込んできた。地球外生命体と戦うウルトラなんとか警備隊のヘルメットのようなものである。「今回はアメリカおもしろデザイン同軸ユニットでいきましょう」と店長の岡田さんから告げられた。ユタというメーカーが60年代に作ったCELESTAという。30cm口径の同軸だ。それにしてもなんでここまでフレームに凝ったのだろう。ユニット単品で販売されていたとは思えない。そしてエンクロージャーに閉じ込めてしまふのが惜しい。

そのエンクロージャーだが、Je-teeがプロデュースした製品に装着されていた。鮮やかな青いファブリックのサランネットがやけにお洒落だ。程良いミドルサイズのフロア型。いいプロポーションだと思ふ。いま、新型スピーカーは、判で押ししたようにブックシェルフかトールボーイばかり。このタイプの復権を望みたい。

ダイアナ・クラールのヴォーカルで試聴が始まる。明瞭でドライな質感。しかし音が薄くはない。反応がいい。ハイファイ録音で有名なドナルド・フェイゲン「ナイトフライ」も分析的ではなく心地よいトーンで聴かせる。

一回り大きい黒のファブリック版もあって、これはユニットが2発入っている。

音はトータルで厚みが出たのは言うまでもないが、高域のレンジが広がったような感じがした。レンジとしては同じはずなのに。サイズとデザインは青。音は黒。欲しいとなったら悩まどころだ。

もうひとつのユニットがGEことゼネラル・エレクトリック製のA1-401。GEは重工業、軍事や航空宇宙産業など世界的に高いシェアを誇る超巨大企業だ。50年代にスピーカーを作っていたとは驚きた。理解に苦しむのが、前面にはめ込まれているスリットを入れた金属板。ヘルメットの次は仮面である。拡散効果を狙ったのだろうか、フタをしてどうする。当時、アメリカ屈指のエンジニアが設計したとは思えない。

滅多に珍しいと言わない岡田さんが「これは相当なものですよ」と指さしたのがGE製のエンクロージャー。A1-401用である。1本しかないでモラルで聴いた。大きく先入観を覆す音が飛び出した。黄金仮面はまったく音をマスキングしていない。それどころかよく抜けていて、めちゃくちゃ現代的な音がある。大らかな広がりもある。当然、仮面は振動しているのでそれが耳につきそうなのだが、まるで感じられない。全体、トータルでチューニングされているようである。非常にクオリティが高い。さすがのGEに舌を巻いた。GE箱はおそらく日本に二つとないようなので、大いに得難い体験となった。